

月例研究会（2020年1月29日）

「青年」運動史研究と 男性史研究の架橋

——第一次大戦後における学生社会
運動を事例として

伊東 久智

本報告は、第一次大戦後の社会運動史に対し、史料の読み直しを通じて男性史的アプローチを試みることを狙いとしたものである。具体的には「青年」という運動主体に着目し、その主体化過程を男性性との関連において考察することを課題とした。対象としたのは、学生社会運動の中心団体・東京帝大新人会で、特に1918～22年頃の所謂「前期学生運動」段階における同会と労働運動とのかかわりに焦点を定めた。

そもそも従来の「青年」研究のなかには、「政治青年」（明治期）→「文学青年」（明治・大正期）→「社会青年」（大正・昭和期）などといった時系列的な類型把握にとどまるものも少なく、そこにジェンダー史の観点が導入されるに至ったのは最近のことに属する。また、「青年」あるいは「青年」運動史を対象とした男性史研究も、現状では日露戦後から第一次大戦期にかけての時期に限られている（加藤千香子氏の「青年」研究や報告者の「院外青年」運動研究など）。以上を踏まえ、本報告ではそれを「社会青年」時代にまで前進させるとともに、日露戦後以降の「青年」／「青年」運動（と男性性とのかかわり）との異同を問う、という視角を設定した。

その上でまず議論したのは、「社会青年」（前期新人会同人）の主体化がいかにして遂行されたのかという点である。報告では第一に、新人会の労働運動への参入に大きな影響を与えた麻生久の自己形成過程を確認した。そこには、大学教育・立身出世に対する反発や、それに代わっ

て「社会」——「虐げられた民衆」のなかに「真実の人間」を見出し、既存の社会的身分秩序を相対化＝顛倒しようとする志向性が認められた。第二に、新人会の自己規定（「純真なる青年団体」）や活動内容（労働運動に参入する「実践派」メンバーの形成）を通観しつつ、彼らが日露戦後以降の「青年」規範を内面化しつつも、労働者との接触が象徴するように、従来とは異質な「青年」主体として立ち現れたことを確認した。

次に、そうした主体化過程と男性性とのかかわりを明らかにすべく、彼らの労働者観や、そこに認められる諸特徴へと議論を進めた。約言すれば、そこには「人類」の名のもとに知識階級と労働者階級との「合体」を訴えたり、労働者を救済すべき女性性（「蒼い顔」の「愛人」）と称揚すべき男性性（「力」を具現化した存在）とを併せもつ仮構の存在として表象したり、他方で日雇い労働者をそこから排除したりする傾向があった。また、彼らが言葉遣いや服装などの面で「労働者らしく」なろうと努めた意識の底には、そうして仮構／選別された労働者の「野性的」男性性に対する「憧憬」があり、一方それとは裏腹に、社会的身分秩序の最下層に位置する労働者に対する優越感も伏在していた。

以上の議論から、報告では以下のような結論的見通しを提示した。すなわち、「社会青年」が主体化の当初において志向した社会的身分秩序の顛倒は、労働運動への参入という形で実行へと移され、それがさらに彼らの主体化を促していったわけであるが、それは仮構／選別された労働者をモデルとして同秩序を「雄々しく」下降するという男性性／マスキュリニティの論理を附随させたものであったのであると（ただし、彼らの労働者に対する優越感が物語るように、それは社会的身分秩序の論理を圧倒したわけでは必ずしもなかった）。

（いとう・ひさのり 千葉大学大学院人文科学研究
院助教）